

水稻における「いもち病」、「縞葉枯病」を防除しましょう

＜中央地区＞

令和4年7月
東讃農業改良普及センター
東讃農業改良普及協議会

いもち病

稲のほとんどの部位を侵し、発生部位によって苗いもち、葉いもち、穂いもち等とよばれます。

いもち病菌は、**温度が15～25℃(特に、20～25℃)で湿気が多い時、増殖しやすくなります**。葉いもちの病斑が多いと(特に上位葉に病斑が多いと)、穂いもちの発生につながり、稔実不良や白穂となり、かなり減収となる場合があります。

まずは、**出穂期までの必須防除を徹底**するようにしましょう。



進行型病斑：これから病斑が広がり、さらに増える → すぐに防除

停滞型病斑：病斑の広がりには止まってはいるが、穂いもちへの感染源になる → 穂いもちに向けた防除

取り置き苗は、いもち病の発生源となります。早めに田から撤去しましょう。

縞葉枯病

ヒメビウンカが媒介するウイルス病です。

分けつ初期に発病すると、新葉が黄白色に退色し、“こより”のように巻いて徒長し、曲がって垂れ下がり、出穂することなく枯死します(このような症状から「ゆうれい病」とも呼ばれています)。分けつ最盛期以降の発病では、葉に淡緑色～黄白色の縞状の病斑が生じます。穂ばらみ期以降の発病では、止葉が黄化し出穂しない、もしくは出穂しても穂が全て出きらず「出すくみ」し、奇形、不稔となります。

病害虫防除所の調査によると、高松市、三木町において、**今年のヒメビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率が、例年に比べ高くなっている**ことが示されました(6月20日発表)。多発生が懸念されます。

【出穂期までに実施する**必須防除**】

防除時期	対象病害虫	農薬名	使用基準		
			10a当たり使用量	使用時期/回数	
い ず れ か	出穂20～15日前	いもち病、稲こじ病、紋枯病 ウンカ類、カメムシ類	ゴウケツモンスター粒剤(注1)	3kg	出穂5日前まで、 収穫45日前まで/1回
	出穂10日前	いもち病、紋枯病 ウンカ類、カメムシ類	ワイドパンチ豆つぶ	250g	収穫35日前まで /1回
	出穂直前～出穂期	いもち病、紋枯病、穂枯れ(ごま葉枯病菌)、ウンカ類、カメムシ類、イナゴ類	ノンプラスバリダ ダントツフロアブル(注2)	1,000倍 (水60～150ℓ)	収穫14日前まで /2回以内(注2)

【いもち病の**確認防除**】毎年、多発するほ場では、早めの防除が効果的です。

防除時期	農薬名	使用基準		
		10a当たり使用量	使用時期/回数	
い ず れ か	葉いもちに対しては初発10日前～初発時	オリゼメート粒剤	3～4kg	穂いもちには出穂3～4週間前。 出穂14日前まで/2回以内
	葉いもちに対しては初発20日前～初発時	コラトップジャンボP	小包装(パック) 10～13個	穂いもちに対しては出穂30日前～5日前まで/2回以内
	初発時	ブラシンフロアブル(注2)	1,000倍 (水60～150ℓ)	収穫7日前まで/2回以内(注2)



ヒメビウンカ成虫

ウンカの発生を早めに見つけるのは、難しいものです。育苗箱処理剤を散布していない苗を植えたほ場や、昨年、縞葉枯病が発生したほ場では、本田防除をしておきましょう。

発病株は、二次伝染を引き起こすので、抜き取って、ほ場の外で処分しましょう



分けつ初期の発病(ゆうれい病)

出すくみ

【ウンカ類の**確認防除**】

防除時期	対象病害虫	農薬名	使用基準		
			10a当たり使用量	使用時期/回数	
い ず れ か	(短期・普通期水稻) 7月上中旬	ウンカ類、ニカメイチュウ ツマグロヨコバイ、コブノメイガ	パダンバッサ粒剤	3～4kg	収穫30日前まで/5回以内
		ウンカ類、カメムシ類	スタークル粒剤(注1)	3kg	収穫7日前まで/3回以内 (注1)
			スタークル豆つぶ(注1)	250g	

(注1) ゴウケツモンスター粒剤、スタークル粒剤、スタークル豆つぶは、同じ成分(ジネフラン)を含んでいるため、全ての剤を含めて3回以内の使用とする。

(注2) ノンプラスバリダダントツフロアブルとブラシンフロアブルは、同じ成分(フェリムシオン)を含んでいるため、両方の剤を含めて2回以内の使用とする。